校長室だより～燦燦～ №４９９

人を遺す

2022.2.3

プロ野球の野村克也監督が亡くなってから、もうすぐ１年になる。選手時代は、歴代２位のホームラン数を誇る一流選手であった。その後、４球団で監督を務め、数多くの選手を育てている。野村監督と言えば、ボヤキと名言である。数多の名言を残しているが、その中に「財を遺すは下、仕事（名）を遺すは中、人を遺すを上とする」がある。

明治から昭和初期にかけて活躍した政治家、後藤新平のこの名言を野村監督は大切にしていた。財産を築いたり、仕事で業績をあげたりすること以上に、人を育てることは難しく、それゆえ価値があるという。野村監督が指導者として大切にしていたのは、選手の個性を見極めることの大切さだった。

阪神の監督時代には、新庄剛志選手がいた。打撃が低迷していた新庄選手にピッチャーとして投げることを指示した。肩の強さが売りだった新庄選手に、自分の素質と可能性に気付いてほしいと考えた。

マウンドに立った新庄選手は、１４０キロ台の速球でバッターを打ち取る。この年、打撃成績を大きく伸ばし、主力として活躍した。野村監督は次のように言っている。

人間のいいところは、どんな可能性があるのか、その可能性を引き出す、見つけることが人生そのもの。（選手が）持って生まれたものだから、それを発揮したらいい。そういうのを見抜いてやるのも監督の手腕のひとつ。

選手の将来性を考え、あえて突き放すこともあった。楽天の監督時代、当時入団３年目だった田中将大投手は、２か月間勝利から遠ざかるなど、大きな壁にぶつかっていた。野村監督は苦しんでいる田中投手にあえてアドバイスをしなかった。球界を代表するピッチャーになるには、自分で乗り越える経験が必要だと考えた。次のように言っている。

手取り足取り何もかも答えを出すのは、果たしていいのだろうか。やっぱり自分で考える、自分で答えを見つける。やっぱり耐える、我慢、こういうのができると更に一段と育つ。楽をして、いい結果は得られません。

教員という仕事は、「人を遺す」ことに大きく関係する。教頭となってからは、常に人材育成を意識してきた。それは、今も変わらない。人を育てながら、自分も成長するということである。根底には、自分が育てていただいたという思いがある。

野村監督が育てた人材が、プロ野球の監督として活躍している。前述の新庄剛志監督もそうである。前年のリーグ６位から日本一へと駆け上がったヤクルトの高津臣吾監督もそうである。今シーズンの日本シリーズは、久々に見応えがあった。おもしろかった。

野村監督のようにはいかないが、出会った以上は、少しでも人を育てたいと思う。そのためには、もっともっと自分を磨いていかなければならない。